慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	楊柳小考 : 柳の民俗、中日比較の視点から
Sub Title	The willow and its treatment in Chinese and Japanese folklore
Author	許, 曼麗(Hsu, Man-Li)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1986
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.50, (1986. 12) ,p.113- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00500001-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

楊柳小考

――柳の民俗、中日比較の視点から――

許　曼　麗

序　言

唐の劉禹錫の「楊柳枝詞」（『全唐詩』、巻三六五）にこのような句がある。

「長安陌上無窮樹、唯有垂楊管離別」。同じく唐の戴叔倫の「送呂少府」の詩（『唐詩類苑』、巻一百六）に「深山古路無楊柳」(1)、折取桐花寄遠人」と言うのがある。いずれも民間の風習である「折柳贈別」を踏まえて詠んだものである。離別詩に出てくる柳はたいていこの民間風習のイメージを帯び、とかく哀情をそゝるものとなっている。離別詩の素材の一つとして、柳を考えた場合、楽府の「折楊柳」の成立が大きな課題となる。そして、つきつめれば柳に関する民間信仰の問題を無視しては語れないと気づく。

戦国策曰、夫楊横樹レ之則生、倒樹レ之則生、折而樹レ之又生。

本草李時珍曰、楊柳縦横倒順挿レ之皆生。

柳という植物は非常に生命力の強いものである。その強さについては諸書に以上のように屢々見えている。このような強い生態こそが柳に神秘性を持たせる最大の理由と考えられよう。

実は、その神秘性を持つがために、柳は華北地域に生活していた漢民族にとって、唯一すがれる植物でもあったようである。自然による不可抗力の災害に襲われ、あらゆるものが地上から姿を消した時、楊柳だけが根強く生き残る。索漠たる黄土地帯に、緑という緑がほとんどない冬の終りに、柳だけが逸早く芽を吹き出す。このような強靭な生命力を持つものは、古代人をして神の樹であると信ぜしめる力さえあったのである。

これに対して、柳を神がかりの神樹として崇める傾向は、日本にもあった。『萬葉集』にこのような歌がある。

楊こそ伐れば生えすれ世の人の恋に死なむといかに為よとぞ　（巻十四、三四九一）

また『日本書紀』の顕宗紀、弘計王の歌とされる

いなむしろ川そひ柳水行けば靡き起き立ちその根は失せず

というのがある。柳の根の強さを詠んでいる。このほかにも柳は和歌の素材として多く用いられている。しかし、ひとり離別を詠んだ和歌には柳は登場しない。

このように、中国では柳が離別詩の素材として多用されるのに対して、日本ではほとんど用いられていない。楊柳が離別詩の素材としてどう脚色されたのかが筆者の本来的な問題意識なのであるが、その避けられない前提である柳の民俗性についてまず考察を加えなければならない。そこで、本稿は紙面の関係上、柳の民俗性だけを取りあげて、中日比較の視点から古代歌謡或いは農書などの記録に頼って調べた結果をまとめようと試みたものである。

一、辟　邪

辟邪の木と言えば、先ず桃の木が想起される。諸々の悪鬼を鎮めるおふだとしてよく聞くものは「桃符」であるが、実は桃の木だけでなく、柳の木も辟邪として機能するというのが古くからの考えである。南北朝、梁の時代に成立し、現存中国最古の農書とされる『齊民要術』（賈思勰著、西元五三五年頃）には営農の実際を詳しく述べられている。その種柳の項に次の記述がある。

術曰。正月旦取二楊枝一著二戸上一。百鬼不レ入レ家。

正月の朝に、柳枝を門に付ければ、諸々の幽鬼は家に入らない。つまり、厄を払うことが出来ると言う。又、正月ではないが、清明の日に、楊柳を門に挿す習慣も古くからあったようである。宋人呉自牧の『夢粱録』巻二清明節に

清明交二三月節一。前両日謂二之寒食一。京師人従二冬至一後數起至二一百五日一便是此日。家家以二柳條一插二於門上一。名曰明眼。

とある。また、明の徐光啓（一五六二―一六三三）の著である『農政全書』にも清明に柳枝を軒下に挿す習慣が読み取れる。

清明喜レ晴。三月清明晒得楊柳枯。十隻糞缸九隻浮。清明無レ雨少二黄梅一。〈中略〉清明日喜レ晴。諺云：簷頭挿柳青農人休レ望レ晴。簷頭挿柳焦。農人好レ作レ嬌。（巻十一、農事）

清明の陽射しによって、軒下に挿した柳枝がなお青々としているのか、それとも焦げてしまうのかによって、その年の降雨量を占うことを内容とする諺である。占いという問題はさておき、ここで注意したいのは、清明の日に柳枝を屋

簷に挿す習慣である。更に、『本草綱目』拾遺巻六、木部はこのように言っている。

清明日挿二在屋簷下一枯柳枝朝レ南者入レ薬。物類相感志。清明楊柳能レ止二醬醋之潮溢一。

ここにはまたも「清明挿柳」と言うことが記されている。なお、中国医薬観の上では、植物はすべて薬になるが、確実にその通り効き目があるのかは疑わしい。しかし、柳に限って言うならば、古くより解熱剤として重用され、これは現代薬学上も柳に解熱作用があると確認されている。他方、同じく清明の日に柳を挿すが、門にではなく、頭に挿すこともある、清人潘榮陛による『帝京歳時紀勝』には次のように記されている。

清明日摘二新柳一佩帯、諺云：「清明不レ帯レ柳、来生變二黄狗一。」

また、富察敦崇の『燕京歳時記』(2)にも

清明即寒食、又曰禁烟節。古人最重レ之、今人不レ為レ節、但兒童戴レ柳祭二掃坟塋而已。〈中略〉至二清明戴レ柳者一、乃唐高宗(3)三月三日祓二禊於渭陽一、賜二羣臣柳圈各一一、謂戴レ之可レ免二蠱毒一。今蓋師二其遺意一也。

とある。この「清明戴柳」は唐代になって始めて姿を現したもので、その前身はやはり門、軒下などに挿す風習があったように思われる。いくつかの書物(4)ではこの「清明戴柳」のことを引いているが、いずれも唐の中宗が渭水で祓禊をしたことを言っている。正史では「清明戴柳」の記録はただこの一例のみで、後にも先にもない。従って、おそらくそれまでは柳枝を挿しこそしたが、頭に戴くこはなかったと思われる。唐中宗の行事がきっかけで、民間、すくなくとも京城(5)では流行したのではないかと思われるが、記録がないので、何とも言えない。いずれにしても、こうして柳を頭に戴くことによって、邪を払いのけ、生命を長らえることが出来ると言うことの背後に、柳に対する呪術的信仰が秘められていることを否定できないであろう。いまでも、寺院や道観などへ行くと、そこに掛けられている観音菩薩は

たいてい柳枝を手にして描かれている。また、そこからもらって来るおふだの使い方については、火で焼き、灰燼を水に溶かしたものを、柳枝で体に振りつけるようにと必ず教えられる。どうして柳枝でなくてはならないのか。いつからこのようになったのか。我々は意味も考えずに繰り返しているのであるが、もしかすると、その由来はやはりこの辟邪の考えから来たものかも知れない。

さて、このような信仰は『萬葉集』の歌にも見出すことが出来る。『萬葉集』には柳を読んだ歌が四十首ある。その中で、「かづら」「かざし」に関わる歌は十二首を数えることが出来る。

梅の花咲きたる園の青柳は縵にすべくなりにけらずや　（巻五、八一七）
青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし　（巻五、八二一）
梅の花咲きたる園の青柳を縵にしつつ遊び暮らさな　（巻五、八二五）
春柳縵に折りし梅の花誰か浮かべし酒杯の上に　（巻五、八四〇）
霜枯れの冬の柳は見る人の縵にすべく萠えにけるかも　（巻十、一八四六）
ももしきの大宮人の縵けるしだり柳は見れど飽かぬかも　（巻十、一八五二）
我がかざす柳の糸を吹き乱る風にか妹が梅の散るらむ　（巻十、一八六五）
遊ぶ内の楽しき庭に梅折りかざしてば思ひなみかも　（巻十七、三九〇五）
しなかざる越の君らとかくしこそ柳かづらき楽しく遊ばめ　（巻十八、四〇七一）
君が行きもし久にあらば梅柳誰と共にか我がかづらかむ　（巻十九、四二三八）

青柳のほつ枝攀ぢ取りかづらくは君がやとにし千年寿くとそ　（巻十九、四二八九）

最初の四首の作者はそれぞれ少弐粟田大夫、笠沙彌、少監土氏百村、壱岐目村氏彼方であり、大伴旅人の歌壇グループに属する人達である。続く四首は詠人不知であるが、比較的萬葉後期に近い作とされる。3905番歌は大伴書持の作で、最後の三首は大伴家持が詠んだものである。この「かづら」とか「かざし」について、西村真次氏の「萬葉集の文化史的研究」（東京堂書店、昭和三年）から引用しておこう。

一體カヅラは何の為めにするか、只だの装飾か、或はマジツクか。起原をいへば恐らく生命を長らふる為めの呪的行為であつたろうけれど、寧楽時代にはもはや装飾が主であるところの、いくらかの呪的意味を伴った年中行事の一つとなつてしまつた。

これに従えば、「かづら」をつけることは、古い時代からのまじないである。かづらにする植物は、ひとり柳だけではない。大和的な呪術植物にはほかにも橿や橘などがある。いずれにせよ、4289番歌を除いて、萬葉集の柳縵歌は遊宴的な意味が非常に強いと言えようが、或は、これは大陸文化を伝えたと同時に、中国式のまじないも一緒に伝わって来たからではないかと想像される。清明の日に柳の環を戴いた大陸の人々の姿は遣唐使らの目にどのように映ったのか、今は知るすべもないが、もし日本でそれまで柳枝を頭に戴くことがなかったとすれば、おそらくかなり新鮮な感じを受けたに違いあるまい。それが遣唐使により日本に持ち帰られ、「信仰志向」から離脱しつつあった当時の文壇において、

「文芸志向」の一形態として、文人たちの間にもてはやされ、それがまた何らかの修正過程を経て、萬葉歌十二首のような形となったものと推測するのは飛躍に過ぎるだろうか。

柳ではないが、『萬葉集』にこのような歌もある。

霍公鳥厭ふ時無し菖蒲縵にせむ日此ゆ鳴き渡れ　（巻十、一九五五）

これは端午の節句に菖蒲を縵にする風習を踏まえて詠んだ歌である。端午の節句における菖蒲について、守屋美都雄氏が『荆楚歳時記』の訳注（平凡社、東洋文庫、一九七八）に、『山堂肆考』を引いて、次のように書いている。

端午、菖蒲を刻んで小人子を為る。或いは胡蘆形と謂う。之を帯びて邪を辟く。

中国の書物に記録が求められるように菖蒲を縵にすることは明らかに中国伝来のものである。このことと十二首の歌の作者がほとんど萬葉後期の歌人、言わば大陸文化の洗礼を受けた人達であることと考え合わせてみても、柳縵が大陸伝来の物であるという想像は膨らむばかりである。

しかし、一方、柳は大陸伝来の植物とは言え、その伝来は唐以前、おそらくは年代も知る由のない遠い昔のことであろう。とすると、柳の呪術性は、中国と日本とでそれぞれ独自に形成されたもので、単に偶然に一致したものだとも思えてくる。そうだとすると、節句伝来とともに、艾や菖蒲を縵とする風習が伝来したのと同じように、柳も何らかの信仰の道具として伝来して来たというのは想像にすぎないかも知れない。結局その起源は、一種の神秘に包まれている。

本節は辟邪として使われた柳についての記録を試みにまとめてみた。ところが、本節に取りあげた例はひとり辟邪のみならず、予祝、または依り木など、二重も三重もの意味を同時に帯有するものとも見受けられる。

二、予　祝

柳は非常に強い生命力を持つ植物であるが故に、古代人の目には神力を持っているように映ったことはすでに述べたが、文明以前、神以外に何一つすがるもののなかった時代には、柳は神にすがる目じるしと目されたのではなかろうかと想像される。稲作民族にとって、最も関心の深いことが稲の収穫量であることは贅言を要しない。いかに多く収穫することが出来るかは、田植えの時期に予祝或いはその他の関連する祭事を滞りなく行ったかどうかによるものと古代人は考えたに違いない。そして、田植えの予祝に用いるには、初春に他の植物より先んじて緑芽を吹く柳こそが最も相応しい植物であると古代人は生活体験に基づいて考えていたのであろうと思われる。残念なことに、以上のような考えを裏づける中国の古い文献は、いまのところ、まだ見当らない。中国の暦法が非常に早い時期に発達し、農村の隅々まで行きわたったせいか、或いは儒教が発達したせいか、民俗的な記録はほとんどないように見受けられる。『礼記』にわずかそれらしいものはあるが、詳しい作法は全くわからない。

是月也。天子乃以二元日一祈二穀于上帝一。乃擇二元辰一。天子親載二耒耜一。措二之参于保介之ㇾ御間一。率二三公九卿諸侯大夫一。躬耕二帝籍田一。天子三推。三公五推。卿、諸侯大夫皆御。命曰二勞酒一。（月令、孟春紀）

是月也。安二萌牙一。養二幼少一。存二諸孤一。擇二元日一。命ㇾ人社。（月令、仲春紀）

天子焉始乘ㇾ舟。薦二鮪于寢廟一。乃為ㇾ麥祈ㇾ實。（月令、季春紀）

『礼記』によると、仲冬と季冬以外は毎月のように、祭祀は行われていたものの、それは極めて簡単にしか記録されなかったのである。いずれにせよ、古代中国では「予祝祭祀」の儀式を行ったことに疑いがない。ただ、これ以上詳しい記録がないので、果して柳がその儀式に使われたのか、使われたとすれば、どう使われたのか全くわからない。典籍に求めることは出来ないが、柳は予祝と深い関係を持っているような気がしてならない。なぜなら、中国の農書にかすかな痕跡が見えるほか、日本の田植えの「予祝祭祀」の行事に柳が神樹として使われたことに求めることが出来るように思うからである。日本に存するから、すぐ中国にも存すると短絡的に結びつけることは甚だ乱暴なことであるが、先ずは暫く日本の田植えの予祝について検討することにしよう。

日本では柳が田植の予祝と関わり深い樹であることは、従来から民俗学の文献によって明らかにされている。柳を歌った多くの歌謡に見られるように、柳はほとんど異なる所なく田植えの神樹と見なされている。渡邊昭五氏の手による『田植歌謡と儀禮の研究』(三弥井書店、一九七三)に「柳と霊域」と言う一章がある。その中で多くの田植歌をあげ、各地に現存する田植習俗に於いて、柳がいかに珍重されているかを指摘された。

おもふ(思)柳をかと(門)田へこそな
ゑた(枝)もさかへ(栄)るかと(門)田へこそな
やなぎ(柳)うへま(植え)い柳はしたれ(垂)わるいに
もりのなひきが(靡)よしの(吉野)へとうとなひい(靡)た
もりのこかけて(木蔭)しの(忍び逢)ひあおうや……

(前掲書、714頁)

田植歌謡はほとんどが恋歌の形で残されている。それは人々が何げなく口ずさんで歌ったかのように見えるが、その中に古代人から引継がれた信仰が含まれることを見逃してはならない。実は、宗教と文学がまだ混同している萬葉時代に、予祝の歌はすでに恋歌の形になっている。従って我々は恋歌の中から宗教習俗を見出すほかない。

小山田の池の堤に刺す楊成りもならず汝と二人はも　（巻十四、三四九二）

青柳の枝きり下し斎種蒔きゆゆしき君に恋ひ渡るかも　（巻十五、三六〇三）

のような歌が東国にある。

田植えにおける予祝の祭祀は色々なやり方があるが、柳の枝を伐りおろして、田、池などに刺すのがその一つである。度々述べているように、柳とは生命力の強い樹木であり、枝を刺すだけでも根をおろすことが出来る。そこで、根が生えるかどうかで、その年の収穫を占う。或いは占い以外に、類感呪術の一つとしても考えられたのではないかと思われる。拠水植物である柳は、豊富な水源を象徴し、そのしだれる姿が稲穂の垂れることを連想させ、サビラキの予祝の木として用いられたのであろう。前にあげた田植歌謡はそのように読みとれる。また、二首の萬葉歌(3492、3603)にもはっきりと柳が伐りおろされ、田に刺されたことが読みこまれている。柳の呪術性が十分に読みとれるが、むろん、ここでは稲の予祝に止まっていない。一年の実りの予祝から敷衍して、男女二人の恋が成就するかどうかを占う。3492番歌の「成りも成らずも汝と二人はも」などは、消極的な神任せの占いではなく、むしろ積極的に強い願望を示している。

このような素朴な歌は、大体春の歌垣において、男女の唱和によって歌われたと考えられる。民間信仰の行事に使わ

れたものが、時代が下るにつれ、信仰からだんだん遊離して、生活の景色、風物に溶け込み、やがて純粋に歌の素材として定着することは、文明が進歩していく過程では避け難い宿命である。さいわい、萬葉時代に東国で歌われた数々の歌謡にはまだ濃厚な信仰性が含まれているので、当時の習俗の一斑を伺うことが出来たのである(6)。東歌に柳の語を含む歌は六首ある(7)。全部が恋歌であるが、その背後には当時の人々にとって、生活の中に浸みこんでいる民間信仰があり、歌の素材そのものが生活に深い関わりのあるものであることを忘れてはならない。

東歌の恋歌から、日本では萬葉以前から田植の予祝に柳を使っていたことがわかる。さて、それでは一体中国の予祝とはどういう関係があるのだろう。ここでもう一度改めて指摘しておかねばならないことがある。柳は日本の土着植物ではないのである。古い時代に大陸から伝わったとされている。どうしてこのような外来の植物が昔の大和民族の農耕習俗に入りこめたのであろうか。予祝の習慣がもし大和民族独自の発想ならば、一つ考えられることがある。それは柳が持つ強い生命力が古代の大和民族に呪的イメージを持たせ、元来行われていた予祝に、柳を神樹の一つとして加えさせたからではないかと言うことである。しかし、同じくモンスーン地帯に住む漢民族と大和民族、季節感覚は同じように敏感であったはずなのである。東亜の諸民族が季節感を共通にすると言うことから、年中行事は互いに著しい親縁性を持っていることはつとに指摘されている。もちろん、東亜諸民族を細かく研究すると、互いに非常に異なる所も又、多く出てくること言うまでもない。ただ、親縁性の面から考えると、同じ稲作民族であるので、予祝は両民族ともにあったのではないかと想像するに難くはなかろう。そして、予祝と言う習慣が大和民族独自のものでないならば、柳をもって来た人々自身が柳を神樹とする予祝をしていたのではあるまいか。そして、これが日本に伝わって後、いち早く柳を神樹とする予祝に定着していったと想像することも許されるのではあるまいか。日本の場合には、歌謡和歌などに頼

って考えを進めれば予祝の作法を確認することが出来るが、中国、とりわけ漢民族の場合には困難である。もちろん、一部少数民族の民間伝承に求めることは出来るが、それは次の「依り木」の節にとりあげることにしよう。

『齊民要術』「水稲」の篇に「雑陰陽書曰、稲生二於柳或楊一」とある。明末戴羲の輯する『養餘月令』にやや詳しく引用しているのを見ると

五木者五穀之先也。欲レ知二五穀一先視二五木一、擇二其木盛者一多種レ之、萬不レ失レ一。禾生二於棗一、大麥生二於杏一、小麥生二於桃一、稲生二於柳或楊一……。

となっている。この中には農耕民族が長い年月をかけて得た貴重な経験が読みとれるのだが、いずれにしても、何故「稲は柳或楊において生ず」になったのかは定かではない。

もともと稲作の開始される時期が一年の始まりではなかったのかと推測されている。これは太陰暦で言うと、ちょうど清明節前後が一年の始まりになる。清明節が年の始まりとすると、稲作の開始に先だって、祖霊の加護を求める一方、一年の豊収の予祝祭も行われたに違いない。第一節に引用した「清明挿柳」の風習、あるいは先祖祭にあたって、柳は先祖の来帰の依り木として使われたのかも知れないが、一年の豊作の占いとしても使われたと言う推測も成り立つのではないだろうか。同じく第一節に示した「清明喜晴」の俗諺がかすかな痕跡を示していると見えてならない。

ところで、予祝のもう一つの形として、日本では国ぼめ、寿歌の類がある。すでに述べた弘計王の歌がそうであるが、『萬葉集』にもこのような歌がある。

青柳の上つ枝攀ぢ執り縵くは君が屋戸にし千年寿ぐとぞ　（前出）

このほか、土橋寛氏が弘計王の歌の引用であると指摘した歌がある(8)。それは『榮華物語』（巻十二、玉の村菊）、長和五年二月、後一条天皇即位の条に道長の栄華を讃える一節であるが、次のようである。

大殿は世は変らせ給へども、我が身はいとど栄えまさらせ給ふやうにて、「川副柳風吹けば、動くとすれど根は静かなり」といふ歌のやうに動きなくおはしますも、えも言はずめでたき御有様なりし云云

いずれも祝詞と言うふしが強く見られる。さらに、「我門」と題する風俗歌が次のようにある。

我が門のや　垂らふ柳　さはれ　とうとう　垂る小柳　垂るかいては　なよや　垂る小柳
垂るかいてはや　国ぞ富みせむ　郡ぞ榮えむ　里ぞ富みせむ　我家ぞ富みせむや　垂る小柳

（古代歌謡集、風俗歌）

柳が見事にしだれると縁起が好いと言う民間信仰はやはり柳の呪術性に由来していると見るべきであろう。そうでないならば、柳の枝ぶりによって、国の富から家の富までどうして歌い得たのだろうか。

このような歌は、ほかに『梁塵秘抄』(9) などの今様歌謡の中にすこし見られるが、中国の郊祀歌には、ついいに柳を見出すことが出来なかった。

三、依り木

柳は神が降りやすい形態を持っていると前述した。では、どのような形で柳は依り木として使われたのか。それは古代から引き継がれた習俗にその姿を求めることが出来ると思う。稲作民族にとって、最も大切な行事はほとんど稲の収穫に関わるものであると思われる。そこで、先ず雨乞いの行事を取りあげて目を通してみよう。

中国では雨乞いを「祈雨」とか「求雨」とか言っている。『中国の民族学』(直江広治著、岩崎美術社、一九六八)では「祈雨」について、実例をあげながら、四つの型に分けている(119頁～142頁)。大略は以下の通りである。

(1) **晒龍王**、龍王の像を烈日の下に持ち出し、天日に晒すことによって雨を乞う方法である。大旱に遭うと、村人は柳の枝で編んだ帽子をいただいて龍王廟に集まる。露天に神卓を設け、その上に柳の枝で組んだ神龕を置く。それから色々な行事を行う。芝居をやったり、懇求、賄賂、強迫など種々の手段を使う。

(2) **盗龍王**、隣村から龍王の像を盗み出し、たくさん集めてからそれらを担いで、祈雨行列を作り、神池とされる所まで行く。龍王像はどこから盗んでも良いし、また多いほど良いとされている。

(3) **巡廻**、龍王の像を籠に入れて担いで附近の村落を廻る。各村々の家の門前には水甕が用意してあって、それに柳の枝を挿し、甕に黄紙を貼り、「九江八河五湖四海龍王之位」と書いておく。行列に加わる者は男子ばかりで、いずれも光脚で、頭には「柳条帽子」をかぶる。途中で井戸を見ればひざまずいて拝み、「下雨吧」と喚ぶ。附近の村落を廻り、自村に帰って龍王廟に集まって夜祈禱をする。

(4) **取水**、村からかなり離れた神聖な池か泉に行って、その水を持ち帰って来ることである。

地方によって、色々と細かなきまりは違うが、大まかには以上の方法があると前記の書物に記されている。ここで、柳が広く使われていることに注目したい。(1)(3)にあげた方法以外に、(4)の取水の場合にも、行列に参加する人は柳条帽子をかぶることがいくつか記録されている。柳はここで、一体どのような働きをしているのか。同じく「祈雨」の中で直江氏はこのように言っている。

祈雨儀礼に広く用いられる柳木の意義については、柳が陰木たるに由来する類感呪術の一つとする見方もあるが、それは後世の考え方であり、おそらく古くは雨神の依り代としての意味を持っていたものと思う。〈下略〉

実に首肯される見解である。人間が柳の拠水性を発見し、類感呪術に敷衍するようになるのは、どうしても時代が下り、生活の知恵が生まれて来てからであると思われる。やはり、第一義的には、神の依る所の目じるしとして柳は使われたのであろう。

ところが、日本の雨乞いには柳は出て来ない。日本の場合、民俗採集は中国よりはやくからなされたので、内容、パターンも中国より多岐にわたり、明らかにされている。中には中国と非常に類似する所もあったが、柳を使ったと言う報告は見当らない。日本では雨乞いのみならず、ほとんどの行事に招代(オギシロ)、つまり神招きの道具を必要とする。これら招代には実に多種多様なものが用いられたのである。折口信夫が「髯籠の話」(大正四、五年(『全集』、巻二所収))に言ったように

元来空漠散漫たる一面を有する神霊を、一所に集注せしめるのであるから、適当な招代が無くては、神々の憑り給はぬはもとよりである。

と述べている。

そのようなわけで、人間は小高い山、樹木、神殿の鏡、しまいには位牌まで、自分の都合で適当に招代としたが、その根底に依代の思想がある。柳は雨乞いにこそ使われていないが、神の依代として大切な存在であることは否定出来ないのではないか。潔斎の神招きの樹なる柳の例がある。これは、南方熊楠の日本のお正月の詞始についての記述(『南方熊楠全集』巻二、「柳の祝言」)に見ることが出来る。

〈上略〉又洛中洛外共に貴賤人々元旦の詞始めに夫婦共に清服を着し、妻女先づ「柳の下の御事は」と云ふ時、亭主「されば其事目出度候ふ」と言終りて、屠蘇を飲み、雑煮を祝ひぬれば、其年災を遁る言習はされる。〈下略〉

また神木としても記録されている。例えば、諏訪上社の七神木―桜、檀、ひくさ、椽、岑、柳、神殿松には、柳が入っている。日本の田の神の祭りで、神の座の標示とされるものは様々あるが、柳田国男は、「田のまん中に植物を立てて、それへ御田の神を招き迎えようとする例は少ないながら、全国に分布している」と言い、「田のほとりにある柳や桜、あるいは松の木などの立ち木もまた、田の神の御座であったのではないか」と言っている(10)。さらに、「柳田、桜田、松田などと言う苗字は田の持ち主が自分の田の神を祀る依り木としての立ち木を取り入れて作ったものだ」とまで

言っている。

他方、田の神の祭りの話について、中国にも非常に類似するものがあると伊藤清司氏は指摘している。『中国民話の旅から―雲貴高原の稲作伝承』（日本放送出版協会、一九八五年）、多くの民間伝承をあげ、稲作の予祝儀礼―開秧門(11)を説明した。儀礼に使う立木の多くは、竹、白刺、白青杜、五倍子などであるが、むろん、これは神霊の標識であり、正しく依り代なのである。中国で、田間に立つ自然の立木が開秧門の際の神の標識とされる実例は知らないが、もし、依り代となるものが特定のものでないとするならば、或いは民話「妹田(12)」に出て来る柳樹も、本来は依り代の一種ではなかったかと伊藤氏は論じている。

折口信夫は柳は齋ノ木であって、「ゆのぎ」が「やなぎ」になったと言っている。だから古今集などに出ている青柳という読み方は不自然であるとも言う。（『全集』巻三、「花の話」、昭和三年）その真偽の程は不明というほかないが、このように「斎の木」が語源だと言う説が生まれること自体、柳が持つ神秘的な呪的性格を説明するのに最も相応しいことを示しているのではなかろうか。

実は、田の神の祭りに登場する依代と、予祝に出てくる占いの道具との間にある境界線は非常に渾沌としたものがある。柳を占いの道具として使う知恵が生まれるまで、やはり依代として柳を見ていたであろう。

後　記

「楊柳兒活、抽二陀螺一、楊柳兒青、放二空鐘一、楊柳兒死、踢二毽子一、楊柳発二芽兒一、打二柭兒一。」という謡諺（明、劉侗著『帝京景物略』）がある。陀螺、空鐘、毽子、柭などは全部子供の遊び道具であるが、一応活、青、死、兒などの字と韻を

踏んでいる。しかし、韻を踏むだけなら、別に楊柳でなくてもいいのではないか。劉侗によると、これは二月二日龍抬頭、つまり薫蟲兒(引龍とも言う。けむりで諸々の虫を燻り出すこと)のとき、子供たちが遊ぶ打杖杖の謡である。楊柳は何らかの形で引龍と言う行事と関わったのではないか。また、第一節の引用に出た「清明日家家以柳條插於門上、謂之明眼」の明眼の意味を考えると、どうも一種の招代ではないかと思えてならない。

柳はこのように、民間行事についてはいまだ不明な所が多い。従って、柳が離別詩の大切な素材になるまでの過程で、一体どれだけ信仰の要素が働いているのかは、すぐに判明出来るものではない。離別と言うセレモニーと民間信仰とどう関わり合ったのかは一つ大きなこれからの課題と言えよう。

[注]

(1) 李時珍曰、「楊枝硬而揚起、故謂之楊。柳枝弱而垂流、故謂之柳。蓋一類二種。」つまり、楊と柳とは外形の違う二種類の植物である。だが、詩歌に出る楊も楊柳もすべて柳の類をさしている。従って、本文に出る楊柳は柳のことを言っている。

(2) 『燕京歳時記』について小野勝年氏の訳注がある。平凡社、東洋文庫。

(3) 高宗は中宗の誤である。

(4) 『舊唐書』中宗本紀「景龍四年三月甲寅、幸臨謂亭修禊飲、賜羣官柳棬以辟悪。」『酉陽雑俎』、忠志10「三月三日、賜侍臣細柳圈、言帯之免蠱毒。」『札樸』巻九〈鄉里舊聞〉柳圈曰、清明挿枝於門、又編柳圈戴小兒頭上。案唐景龍文館記上巳日、上賜侍臣柳棬各一、云帯之免蠱毒、馥(作者)謂鄉俗亦此意。

(5) 明朝劉侗の『帝京景物略』にも「三月清明日、男女掃墓、但提樽榼、驕馬後掛楮錠、粲粲満道地。拝者、酹者、哭者、為墓除草添土者、焚楮錠、次以紙銭置墳頭、望中無紙銭則孤墳矣。哭罷不歸也、趨某樹、擇園圃、列坐盡酔、有歌者、哭笑無端、哀往而楽同也。是日簪柳、遊高梁橋、曰踏青、多四方客未歸者、祭掃日感念出遊。」とある。

(6) 東歌によって、もう一つ当時の風習を伺うことが出来る。それは柳の下の女の姿である。古くから柳の蔭に水を汲む人は

婦女に限ると言うきまりが日本にある。これも恋歌の形で、『萬葉集』に見ることが出来る。

青柳の萌うろ川門に汝を待つと清水は汲まず立ち薄平すも　（三五四六）

中国でもこのような柳の下の女性が詩経に登場する。「東門之楊、其葉牂牂、昏以為期、明星煌煌。」白川静氏は、東門は歌垣の場所であると言っている。歌垣の場所における柳の存在については、ちょっと興味のある問題であるが、この予祝の節ではとくに取りあげることを省いた。

（7）正確は五首であるが、巻十五に出ている三六〇三番歌は古歌と称して歌われたもので、東歌的要素が濃厚である故、東歌として数えた。

（8）土橋寛日本書記歌謡補注八三、岩波古典文学大系『古代歌謡集』、昭和三二年。

（9）『梁塵秘抄』、古柳

そよや　こ柳によな　下り藤の花やな　さき匂ふけれ　ゑりな　むつれたはぶれや　うち靡きよな　青柳のや、や、いとぞめでたきや　なにな　そよな

これも寿歌と同一系統のものと言える。

（10）柳田国男全集巻十三「田の神の祭り方」。

（11）「わが国の「サビラキ」に該当するこの田植えはじめを、苗族では「開秧門」とか「開活路門」と称している。近年はだいぶくずれてしまったが、この開秧門にはきびしい仕来りがあって、苗の採取の手順、その苗を最初に植え田とそれを植え人とが予め定まっていたらしい。」伊藤清司氏の『中国民話の旅から』七四頁より。

（12）注（14）と同一書物の〈雲貴高原に伝わる「妹田」説話〉八三―八五頁。

〔付記〕本論脱稿後水上静夫氏に『花は紅・柳は緑―植物と中国文化一』と言うご著書があることを知った。そこには当然本論で引用した資料と重なる箇所がすなくないことをお断りしておきたい。